

保科佑成

## 映画評論分析

### 三宅唱監督作品の作家性を分析する

#### 要旨

本研究は、映画監督三宅唱の作家性を作品鑑賞によって分析したものである。問題意識としては近年、日本映画が世界的躍進を遂げている中で三宅も評価されているが、作家性について論じた論考が少なかったこと、評価されることには社会的理由があるのではないかと二点が挙げられる。

仮説は、「三宅唱は個人と時間を記録することで社会を浮かび上がらせる作家である」というものである。この仮説を検証すべく、本研究は、『きみの鳥はうたえる』（2018）、『ケイコ 目を澄ませて』（2022）、『夜明けのすべて』（2024）の3作品を、「生活の街並み」「人々の動作」「関係性の変化と共同体とのかかわり」の3つの観点から鑑賞し、さらに文献での補強を行った。

分析の結果としては、三宅の作品は、登場人物の生活圏内の反復や、細かな俳優陣の動作によって「個人」を捉え、登場人物の関係性の変化や共同体のかかわりを捉えることで「時間」を映画内に記録し、「生きづらさ」を抱えた登場人物たちの直面する社会の実情を浮き彫りにしていることが明らかになった。よって、仮説は立証することができたと考える。

ただし、青春映画として人物描写の側面を優先した『きみの鳥はうたえる』は唯一、例外であった。しかし、3作品中2作品において強く仮定した作家性の要素と3つの視点の要素が含まれていたため、「三宅唱は個人と時間を記録することで社会を浮かび上がらせる作家である」という仮説は立証できたと結論付ける。